研修報告　D1 班　team MIE
「地域との連携をよりよくするための方策」

「教育活動や大学の管理運営のイノベーションに向け ICT を活用した望ましい改善策の構想づくり」という観点からテーマを設定し、グループ討議を行った。

１．大学の役割

ICT を活用した大学改革についてテーマを設定するにあたり、まず、大学とは社会の中でどのような役割を果たすべき組織なのか、という点を考えなければならない。我々D1 班は、討議の結果、(1)「社会が求める人材を輩出する」、(2)「地域の活性化を行う」、(3)「知の拠点となる」という３点が大学として特に重要であると考えた。これらの役割を果たすためには、地域社会のニーズを拾い上げ、地域・他大学と連携し、多様化する社会に対応する教育・研究を行い、自ら情報を発信するという取り組みが必要である。

２．大学の現状

しかしながら、現状は、目標の無い学生の蔓延、地域社会・他大学との確執、問い合わせ先の不明確化、情報の不透明性などにより、社会の中の組織として不満をもたらす要因が多種多様に存在しており、その結果、前項で挙げた大学としての役割を十分に果たせていない、と言うことができる。

３．地域連携をテーマに選んだ理由

大学としての役割を果たすためには、人生のベテランである地域住民との交流を経て、社会のニーズに応えられるような学生を輩出しなければならない。また、そのような人材を地域社会に送り出すことで、若者の視点を取り入れた地域の活性化が可能であると考える。

そこで、「地域との連携をよりよくするための方策」を実施することで、イノベーションを起こせないかと考えた。当然ながら、それを実現するためには、様々な問題点があることを理解し、それらの問題点をクリアした上で運用しなければならない点にも留意した。

４．問題点

まず、第一に、お互いの情報を気軽に共有出来ていないということが問題であると考えた。「学生」・「地域」・「大学」・「企業」では、お互いのことをよく知らず、お互いにどんなニーズがあるのかということが分からない、交流もごく一部の上層部間で形式的に行われることが多く、現場単位での交流ができていない、学生が地域と関わるような手段も無く、目標が無いまま学生生活を送ってしまう等、コミュニケーションや情報共有といった点で様々な問題を抱えている。

５．なぜこのような問題が起こるのか？

理由としては、「学生」・「地域」・「大学」・「企業」がお互いの情報を知る機会がないのはもちろんのこと、受け身な学生が地域活動へ参加する仕組みが構築出来ておらず、また、大学が地域へ情報を発信出来ていないことが考えられる。

６．解決策の検討

この問題を解決しない限り、大学でイノベーションを起こすことは不可能である。
我々D1 班は、次に解決策として何が出来るのかを考えた。一部の職員だけで頑張っても意味はなく、職員全員が一丸となって取り組む必要がある。

大学としての取り組みは、「授業のカリキュラム中に地域連携を取り込む」という方法がある。

最初は強制力による不本意な参加かもしれないが、徐々にでも学生に興味を持ってもらえるようなきっかけづくりとしては有効である。また、学生活動体験をデータベース化するということも考えられる。具体的には、学生に映像・レポートを作成させ、そのデータを蓄積、次年度の学生の履修時に活用するといった方法が考えられる。教員が出来る事としては、自分が得た地域のニーズや活動内容を学生へ授業や地域のイベントごとに、その都度発信していくという方法が考えられる。職員の役割としては、ポータルを活用し、教職員や学生へのタイムリーな情報提供を行うことなどが考えられる。

これらのことを簡単に実現出来るか、というとそうではない。解決策を実現するためにもハードルがあり、その打開策が必要である。

全体から協力を得るためには、教員と地域間で win-win の関係を築く必要がある。どちらか一方が利益を追求し始めたとたんに、連携が崩壊することは想像に難くない。

他にも、地域連携をする際のフィールドワークや地域とのやり取りをカリキュラムに組み込むことが難しい分野の教員も居るといった問題も起こり得る。そこで、教員と地域が連携をする際には、授業のタイプ・内容・担当教員を事前に選定の上カリキュラムに地域連携を入れてもらうといった依頼の仕方も必要となる。

地域との協力体制を確立する観点からは、各教員が保有している人脈を共有し、その内容をシステムにアップロードすることで、大学全体の取り組みとして「見える化」し、学生や地域に分かりやすく伝えるといった工夫も必要である。

７．大学のイノベーションを行うには

大学にイノベーションを起こすためには、地域の人々を含めた関係者からのフィードバックを共有し、さらにその PDCA サイクルを回し続けることが重要である。そこで我々D1 班は「学生・教職員・地域・ステークホルダーが参加できる『情報共有システム』」の構築を提案する。本システムに求められる具体的な機能としては、(1) 学生が作成した動画・報告書を閲覧・蓄積出来るデータベース、(2) 関係者が気軽にコメント出来る機能、(3) 離れた場所でも対話出来る会話型のシステムなどが挙げられる。また、将来的には、ボランティア募集機能・イベントの掲載など、様々な分野へ展開するための機能を追加することも可能と考える。

８．その結果

学生は、様々な経験で主体性・社会性が育まれ、人と密接につながる。その効果として、自ら学び、自己実現をしていく人材に成長していくことが期待される。

地域においては、若い力や考え方を取り入れることで、新たなアイデアが生まれる。また、伝統や歴史を守る次期後継者が大学から現れるかもしれないという期待が寄せられるなど、地域の活性化に向けたきかっけづくりに繋がる。

大学においては、地域と連携することで、他大学にはないその地域の特色を活かした教育や研究が実現出来るようになる。そして、そのような取り組みを実施する過程で認知度が上がり、大学に向けた期待感も高まるであろう。また、SNS などのコミュニティ上では「この大学では面白い研究が出来るようだ」といったような口コミも良くなるだろう。その結果、受験生が増加し、学ぶ意識の高い学生が集まることが期待される。

このように、「学生・教職員・地域・ステークホルダーが参加できる『情報共有システム』」を構築することによって、「地域」・「大学」・「学生」の距離が縮まり、win-win の関係が実現し、その結果、大学の改革に貢献出来るというのが D1 班の ICT を活用したイノベーションの提案である。

以　上